



しよ
死与の少女

あいしん
～ 穢身に秘めし騎士道 ～

CONTENTS

序章	のぞみ 光芒	3
死与		7
月下		26
穢身		70
暗涙		90
疾駆		130
飛翔		174
決意		188
栄光		225
終章	あす 暁光	237

登場人物紹介

特務騎士・トリカブト

セントフローレス騎士団所属の^{フラワーナイト}花騎士。世界花に選ばれた花騎士の一人であり、害虫と戦う日々を送っている。故郷を抜けた後で、自らを助けてくれた団長に対して一途な想いを抱いている。戦場では影の獣を従わせた戦法を得意とする。

上位騎士補・リュウゼツラン

トリカブトの先輩で、第一部隊所属の花騎士。世界花から授かった加護には特別優れている点はないが、実力は高い。トリカブトを妹のように可愛がり、姉のように振る舞う。

上位騎士・アネモネ

世界花からの恵まれた高い加護と、天性の戦闘センスを併せ持つ花騎士。セントフローレス騎士団においてはトップの実力を持つとされ、アイドル視されている。第一部隊隊長。

中位騎士・チョコレートコスモス

トリカブト、リュウゼツランの親友。リュウゼツランと同期であり、同じ弓を扱う花騎士でもある。セーラー服状の赤と白の戦装束を身にまとい、新型のコンポジット・ボウを得物としている。

特務騎士・カトリア

極秘の任務を遂行する特務騎士の一人。セントフローレス騎士団に所属しているが、とある理由によりその存在を知る者は少ない。飽くなき魔力を活かした核熱魔法を得意とする。

団長

セントフローレス騎士団の団長。やや長い髪と飄々とした性格を持つ、優男の青年。害虫に襲われた故郷から逃げ出したトリカブトを騎士団に引き入れ、その活躍を見守っている。

序章 光芒

『世界に殺される』

薄れゆく意識の中で頭に浮かんだその言葉は、今潰えようとしている少女の現実を表した。名前すら知らない平原の中でちっぽけな自分。雨雲が天に覆いかぶさり、月も星空も見えない闇の中。ひたすらに裸足で歩いてきたぬかるんだ足跡も、一歩進めばどこにあるのかもわからない。

濡れそぼった体を酷使させ続け、疲労と寒気に包まれた少女は限界を迎えていた。立つ力も残されず、顔に大量の雨粒が落ちてくる。それはまるで、針が落ちてくるかのよう。冷たく、鋭いものだ。全身を地面に縫い付けられ、動く力も残されていない少女は、水も食料も持ち合わせていない。無策で生まれ故郷から逃れた人間の末路としては当然だということ。少女はよく理解していた。

ここは何処なのだろうか。月も見えず、光のない世界で少女は考えた。祖国を覆う白雪の景色はいつの間にか消えていた。日が落ちる前に広がる緑が地面を覆っていたような気もするが、今のとぎれとぎれの意識を保っているだけの少女には定かではない。

空腹で絶え間ない飢えが襲ってくる。食せる木の実も生き物も見当たらない。

このまま自分は死ぬ。この空のように暗雲のような過去しか持たず、目指すべき願いすら絶

望に覆われてしまった少女は自分の生の無意味さを嘲笑^{わら}った。数えるだけの歳しか生きていないが、そこにあるのはあまりにも無情な結果。親も友も殺され、残った者で訓練という名の殺し合いばかりだけだったから——少女は想う。

この世界に希望なんてない。

あるのは果てのない絶望だけ。

——ああ、いやだな。

こんな思いばかりするのなら生まれてこなければよかった。

はじめから、生きていたくなかった。

自分の死を待たため目をつむる。このまま眠るように死んでいきたい。視界を閉ざし、残りの感覚も遠ざかっていくような気がした。そのまま自分も闇の中に溶けていくのではないかと思えた。

会えるのなら……もう一度、家族のみんなと……

少女のその願いすら、世界に届くことはなかった。

自分は生きている。一步も動けず、動かない己の体という、殻を破ることは許されなかった。少女は思う。

どうして、まだ自分は生きているのだろうか？ まだ苦しめというのか？
早く、死にたかったのに。

白味を帯びてゆく暁の空が、これほど恨めしく思えたことはなかった。
いつもと変わらず昇ってゆく太陽の光が、朽ちていく自分を眺めているようで厭になる。
しかし、太陽の他に別の何か自分が自分を覗いていることにも気付いた。

大樹のような男だった。

空と地平線しか見えない草原の上で、最初からそこにいたように立つ青年が自分を見下ろしている。その顔は長い前髪と太陽を背にしていることでよく見えないが、彼の持つ若葉色の瞳が自分の瞳をまっすぐ覗いていることに気付く事はできた。

その男は消え行く影のような自分へと腰を落とし、無骨な手を差し伸べた。
男は言った。いこう——と。

その手をとれば、どこに行けるといふのだろう。

希望の満ちた場所か。それとも再び絶望に満たされた場所か。

行き先の分からない片道切符が目の前にあった。

それでも、他に何もなく、寂しいここよりかはずっとましだと思えたから。少女はその手を全力で掴む。その手が幻ではないことに安堵し、泥だらけの自分は男に引き寄せられた。勢い

がついた体を止めることはできず、骨と皮しかない弱りきった自分は彼に寄り添うように体を預けた。

彼の体は温かい。自分はこの感触を生涯忘れないだろう。

この熱をいつまでも感じたい。男の手をずっと握りしめる。

少女の長い夜が明けた瞬間だった。

死与

冷たい夜風が全身を打つ。

既に日は落ち、闇の中にあるのは見渡す限りのひび割れた地面。

乾いた土から舞い上がる埃が、どこか彼方へと消えていく。

闇に覆われた荒野に一人の華奢な影がいた。

細身の影は少女だ。

紫色の二つのリボンを頭に付け、腰まで届くほどの長さを誇る黒い長髪を二つに分けて結んでいる。月夜を受ける、白い陶磁のような肌に纏うのは漆黒のゴシックドレスだ。

荒野には異質で不釣り合いな姿だが、これが一番少女にとってなじむ服だ。戦士として戦いに赴く時の姿なのだから。

「……見つけた」

少女、トリカブトはまるで洋人形のような無機質な表情と、ルビーのように紅い瞳を目的地の方へ向けてそう呟いた。

彼女は フラワーナイト「花騎士」と呼ばれる存在であり、この世界スプリングガーデンの平和を護る戦士の一人だった。

その双眸に映るのは、荒野の果て。

そこには石造りの廃墟があった。嘗て前線基地として使われていた砦である。スプリングガーデンには人類を襲う敵、害虫がいる。

そして、トリカブトがこの砦に訪れたのは、砦にひそむ害虫を殺す為だった。

闇に包まれた砦は人氣が全く無く、不気味だ。しかしトリカブトは全く意に介することもなく、迷いなく半壊した城門から侵入した。

——ここも、害虫に。

トリカブトは砦の二階の回廊に出た。

警戒しつつ進んでいると脚に何か当たるのを感じた。

骸だ。骨の持ち主はとうの昔に命を落としていたのだろうか、腐乱した肉すらない瘦せこけた白骨が、気付けば闇の中に数多く横たわっていた。

損壊も酷く、骨の一つを拾い上げてみれば砂のように崩れてゆく。

随分この砦は放置されていたらしい。

それは害虫が棲み着く条件としては整っていた。トリカブトはますます確信を持って歩き続ける。

「！」

不意に、何か無数の音が回廊で鳴り響き、反射的にトリカブトは身体を翻し、身を低くして物陰に隠れた。敵だろうか？ トリカブトは身の危険を感じて反射的に武器を握りしめる。

——害虫？

しばらくして音は止む。

周囲の安全を確認し、トリカブトはふたたび立ち上がった。僅かに見えた影のような姿……害虫ではない。コウモリだ。

「……ほっ」

安堵より、落胆で小さくため息を吐いた。

倒すべき害虫じゃない。そんな期待はずれの気持ちしが押し寄せて肩を落とした時のことだ。ズン、と砦に重い音が響き渡る。

「何……？？」

同時に襲いかかってきた突然の揺れにトリカブトは姿勢を崩しそうになった。

巨大な何かが遠くの石壁に激突したような……。そう思った時、暗闇の奥から何か近づいてきていることに気付いた。地響きも大きくなる。その影は回廊の壁を巨体で押しつぶしながら飛び込んできた。反射的に回廊の窓から外に飛び出して、砦へ振り返った。

後を追って外に飛び出してきたのはチョウ型の害虫だった。月夜に照らされているその異形の巨体は、任務の資料に載っていた情報と一致した。

「やっ」とみつけた……汚染害虫！」

体中の至る所が蒼いまだら模様で覆われていること。皮膚が通常見られる害虫と比べて明ら

かに黒みを帯びていて、いびつに発達した外骨格を持っていること。

ここ最近になって存在が確認された、変異体の害虫の総称をトリカブトは口にした。

「やつと……やつと見つけたの……！」

向こうからこつちを襲いに来てくれる。

それは何よりも、この任務を終わらせて騎士団に帰ることができるということだ。

トリカブトは右手に集中力を高める。

すると、何もない空間に紫色の光がつどい始めた。その光を掴みあげると上部にドクロの装飾、反対側に刀身が付いた権杖が現れた。

愛用の得物、シガブリエル・ラチエツトグだ。

「さあ、ご飯だよ」

トリカブトは権杖を害虫に向けて真っ直ぐに突き出し、手の力を緩めた。

杖がひとりでに宙に浮き、再び紫色の光をほのかに放ち始める。

トリカブトは魔法を操る花騎士フラワーナイトである。

ドクロの権杖はトリカブトの魔力によって浮遊し、その下の大地を中心に広大な円陣を描き始める。

「うん、あれを討つの。今日の晩御飯だよ……」

魔法陣の一面に、底知れない闇が突然形成され、沸騰した湯のように泡立つ。やがてその液

状化した魔力は虚空へと続く大孔へと姿を変えていく。害虫はその様子を目にして激しく威嚇していた。

——さあ、おいで。

トリカブトがそう心の中で呼ぶと、魔法陣の奥からもう一つの自分がせり上がってくる。それは黒い狼の顎だ。

人の体躯の数倍はある大きさの顎が、地面を裂いて荒野に雄々しい遠吠えを上げる。害虫は突如として現れた未知の存在に怯んでいるようだった。

「食べちゃえ」

トリカブトは使い魔、シガブリエルシに思念を送る。直後、シガブリエルシは乱杭歯を開いて害虫の片翼をもぎ取り、地面に墜としていた。

「……ごっくん、して」

その声に応じ、シガブリエルシは害虫の体を頭から勢い良く噛み砕いた。全身を痙攣させつつ害虫が地面で暴れ続けている。

しかし無駄だった。数秒も立つと害虫は動かなくなった。害虫の持つ苦しみを死、与、え、る、こ、とで取り除いたのだ。

害虫を討つ、それが花騎士フラワーナイトの仕事だ。

が、嘗て人間とともに平和を謳歌していた虫の成れの果てが、苦しむのを見たくはない。

「もう、人を殺さなくていいから……」

トリカブトは権杖を横薙ぎに軽く振るった。すると、*「ガブリエル」*は害虫の死体を丸呑みにした。

そして、トリカブトは *「ガブリエル」* が喰らった害虫の命が自分の糧になるのを感じる。

「ガブリエル」 はもう一人のトリカブトとも言うべき存在であり、*「ガブリエル」* の中で消化された敵はトリカブトの魔力となるのだ。

「うん……貴方の命は私がもらうから……だから、おやすみ……」

トリカブトは *「ガブリエル」* の召喚を解いて害虫がいた場所を見つめてそう言い残す。

任務は終わりだ。

今日もまた、団長に託された特殊任務——特務をこなすことができた。

汚染害虫は環境に悪影響をもたらし、並の花騎士に対して危険なことから存在を秘匿されている。

故に通常の任務において討伐が許されていない。

しかしトリカブトは丸ごと使い魔で害虫を消化できる力を買われて、団長から汚染害虫を斃す特務を任されていた。汚染害虫を斃せば斃すほど、団長に褒めてもらえる。

「さ、帰ろう」

トリカブトは権杖を浮遊魔法をかけて飛翔し、夜の荒野から離れる。

目指すは自分の所属する「セントフロレス騎士団」の本拠地がある王国、ブロッサムヒルの城だ。

この世界を護る団長の邪魔をする害虫は全て討つ大好きな彼の為なら、どんな害虫が相手でも戦ってみせる。

それが、トリカブトの騎士道。自らのかかげる栄光へと進む、トリカブトの生き方だった。

害虫の任務を終えて三日が経った。

フォス平原の東にある訓練場で、トリカブトは権杖を右手に携えながら草原の上で佇んでいる。

蒼い空が眩しい。周りには自分を見護る騎士学校の生徒や教員がいた。

「またせたわね……日向ぼっこはそろそろ終わりにしてもらおうわ！」

「うん……待ってたよ。そろそろ来ると思ってた」

「遅れてないでしょ？ 私、セントフロレス騎士団のリユウゼツランは晴れ舞台を疎かにはしないわ」

そこに訪れてきた声——リユウゼツランに、トリカブトは笑顔を向けた。

金の長髪を靡かせた彼女は、戦装束である軽装の鎧とフリルの付いたスカートを身にまとっていた。その左手には刃のついた弓が握られている。

「いきなり、生徒たちの前で模擬戦をやれたなんて急なお願いよね……でもまあ、この勝負、勝ち取らせて貰うわ。かわいい後輩相手でも負けないんだから」

いつもの癖である、腰までかかった金の髪を右手で靡かせている。

先輩である彼女の余裕そうな仕草に、少しだけ緊張感が高まってしまふ。

「これより、フラワーナイト花騎士同士による公開模擬戦を開始します。双方、武器を構えてください」

審判役である、藤色のセミロングの少女、アネモネがそう口にした。

彼女もフラワーナイト花騎士でありトリカブトの先輩だ。

その合図でトリカブトは権杖を握る右手に力を込める。

「リュウゼツラン……私だって強くなっているよ。今日こそ勝つから……！」

「それくらい上等よ。かかっていらっしやい？」

トリカブトはそう静かに豪語し、戦う覚悟を権杖に送る。その想いは、再び使い魔の黒狼を呼び出す。

「行こう……！」

「ガブリエル」は巨大な顎を地面から突き出し、低い唸り声を上げながら彼女を光る目で睨みつけた。

フラワーナイト花騎士相手にも変わらないその獣の響きに周囲もおののいたのか、候補生達は沈黙を破り始める。

ざわついた周りをトリカブトは一瞥し、その後で今一度リュウゼツランに向けて権杖を構えた。

「みんな、騒がなくていいよ。見た目は怖いけど、あの使い魔はトリカブトの言うことを絶対聞くから。誤って襲いかかったりしないよ」

アネモネがなだめるようにそう言い、騎士学校の教師たち生徒たちを落ち着かせた。

「がんばってー！ リュウゼツランさんー！」

「暗そうなあの子に負けないでー！」

「あつはは……応援、ありがとう。みんな」

「……私、悪役あつかい……？」

だ自分のような猛獣を従えて戦う花騎士フラワーナイトは候補生にとって受けが悪かったらしい。トリカブトはその周囲の態度にいささか傷ついてしまう。

——絶対負けないもん。

トリカブトはそう思いながら、審判役のアネモネに視線を送った。リュウゼツランも合わせてきた。

「……それでは模擬戦……はじめッ!!」

彼女の合図で模擬戦の火蓋が切られた。ガブリエルが遠吠えでリュウゼツランを威嚇する。やる気満々のようだ。

「狙い撃つわッ！」

先手を取ったのはリュウゼツランだ。彼女は刃弓じんきゆう、ドラケンスフレッサーグをすばやく正面に構える。直後、弓に光のつる、添えた右手に光の矢が現れ、トリカブトへと狙いを定めてきた。

「ガブリエルグ！」

トリカブトはその構えを戦友として何度も目にしたことがある。矢の方向を見切って、そこにガブリエルグを割り込ませる。

「まとめて貫いてあげるわ……！ドラケンスフレッサーグ！！」

リュウゼツランが愛用の弓の名を叫びながら光の矢を放った。矢の速度は見えないほどに疾く、花騎士であろうとも捉えられない。

しかしガブリエルグは見切った。光の矢に噛み付いて、無理矢理形状を破壊して爆発させる。巻き上がる土煙を隠れ蓑にして、トリカブトはリュウゼツランへと飛び込んだ。

「行くよ！リュウゼツラン！！」

——まずは、撃たせない！

長距離では一方的に狙われることを理解していたトリカブトは、弓を撃たせないために接近戦を狙った。反転させた権杖をを前方に構え、刀身に紫色の魔力光を集める。

「はあッ！」

正面から権杖を振り下ろし、リュウゼツランの体を捉える。

「おっと、幕切れには早いわねッ！」

しかし、リュウゼツランは不敵にそう返した。

勢い良く地面を蹴り、後方へと背転する。

そして空中から弓を向けてきた。その軽やかな動きはまるで大道芸のようでもある。

派手な動きに周囲の花騎士^{フラワーナイト}達が声を上げ、中には拍手をするものまでいた。

反撃が来る。空中から襲いかかってくる矢を見切り、トリカブトは地面を駆ける。しかしその全てをかわし切ることができなかつた。最後の矢が目の前に迫る。

——受ける、しかない！

杖に念じ、若葉色の光の壁を正面に展開する。

魔力障壁と呼ばれる花騎士^{フラワーナイト}の防御手段だった。

この魔力障壁は一種の斥力場を生み出す。害虫の攻撃から身を護るための手段だった。

その矢を魔力障壁で受け止めた途端、瞳を灼くような眩い発光現象が起きた。

矢と盾の間で激しい光が弾け続ける。互いの力が拮抗している証拠だ。

しかしトリカブトの盾のほうに僅かに負けてしまった。障壁を打ち破られて大きくのけぞってしまふ。弓を構えているリュウゼツランを睨みつけながら、相棒に戦意を向ける。

「お願いッ！」

「ガブリエル」がトリカブトに応える様に雄叫びを上げた。すると、「ガブリエル」は魔法陣

の中から飛び出し、四脚を持った黒狼の姿で大地を踏みしめて現れた。

そのまま矢を撃つ直前だったリュウゼツランの方へ走っていく。

「噛み付いちやえッ！」

「わっと、危ないわね！ 猛犬は鎖に繋ぎなさい……って！」

リュウゼツランは不敵にそう言いつつも、飛びかかってきた乱杭歯を、ドラケンスフレッサの刃で受け止めた。更に、ガブリエル^〴の横腹に蹴りを浴びせて、強引に距離を離れた。

——今だ！

その隙を突く。

ガブリエル^〴に気がそれた彼女に向かってトリカブトは躍り出た。再び権丈の刀身をリュウゼツランへと突き出す。

が、リュウゼツランは笑みを崩さない。

ガブリエル^〴に回し蹴りを繰り出したあとで、弓の刀身でトリカブトの一撃を受け止めた。互いの得物から衝撃と金属音が響き渡る。

いつの間にか、トリカブトたちの戦いを眼にしていた生徒たちはトリカブト、リュウゼツラン、別け隔てなく応援していた。それだけ二人の戦いは激しく、レベルの高いものだった。

——リュウゼツラン……やっぱ、強いね……！

集中していたトリカブトはそんな応援に気づかないまま、リュウゼツランの強さに感心する。

彼女はトリカブトから離れた後で満足そうにこちらを眺めていた。

「また強くなってるんじゃない？ 今の、ちよつと前の私だったら対応できてなかったわ。……貴方の騎士道、磨きがかかっているみたいね」

「リュウゼツランだって、シガブリエルグの牙を躲すなんて……でも、後少し踏み込めてたら届いてた。そうすれば私の勝ちなの……」

「その言葉、生意気よ。模擬戦とは言え、私が後輩のトリカブトに簡単に負けちゃったら、ここにいる未来の花騎士達フラワーナイトに上位騎士補としての示しが見つからないんだから。こんなもんじゃないでしょ？ ……トリカブトの力は！」

「当たり前」

手招いて問うリュウゼツランに即答し、シガブリエルグと共に彼女の前に立つ。

「行くわよトリカブトッ！ お楽しみは、これからよ！」

リュウゼツランのその啖呵を合図に、唇を僅かに曲げてトリカブトは大地を蹴った。両者の得物が交錯する。

互いの強さを認め、互いにその力を高めあってゆく。

これが、フラワーナイト花騎士の日常だった。

「二人共、お疲れ様。はい、ジュース」

自分達花騎士の本拠地であるブロッサムヒル城。その一角にある休憩室にて。アネモネが微笑みながらトレイに載せたコップを渡してくる。

アネモネは審判役を終え、候補生の前で身につけていた騎士服から堇色のマントを外し軽装の姿でテーブルを挟んで座る。

握っていたお茶を彼女は飲み始め、一息つき始めた。

「結構いい運動になったわ、久々の模擬戦だったし……やっぱり体を動かすのはいいわね」
「わたしの方はもうヘトヘトなの……一日分の体力使い切ったような気がする……」

隣のリュウゼツランが暴れ足りないとはかりにそう言うものの、トリカブトとしては体力の限界だった。模擬戦を終えたトリカブトは、ダラりと崩れ落ちる。

トリカブトはアネモネから渡されたリングジュースをストローで飲みながら、半目でリュウゼツランを睨んでいた。

結局模擬戦は、リュウゼツランの勝ちに終わった。

単純な実力は互角と言ってもいいが、接近戦に移った際、遠距離戦の時点で体力を削られていたトリカブトは遅れを取ってしまったのだ。

「使い魔と一緒に戦えるのはトリカブトの強みだけど、もうちょっとトリカブト本人の方も鍛えないとね。もっと強くならなきゃ、団長様は褒めてくれないわよ？」

「リュウゼツラン、意地悪」

「でも正論だよ。基礎体力は花騎士の基本。フラワーナイトもっと頑張らないと、昇任の道のりだって大変かもね」

「うにゅ……負けないもん。絶対私も、アネモネやリュウゼツランのように騎士の位を上げていく。そして——」

「そして、愛しの団長様に褒めてもらいたいんでしょう？ 分かってるわよ」

「む……そう、だよ」

照れるトリカブトに対し二人の先輩騎士は微笑む。

この三人の中では、トリカブトは最年少だった。

この騎士団で顔を合わせた頃からずっと一緒に行動している。

リュウゼツランは面倒見のいい性格で、次期上位騎士としての昇任も控えている優秀なフラワーナイト花騎士であり、アネモネの方もまた騎士団内で上位に位置する槍使いだ。

姉のような二人が持つ強さに、トリカブトは憧れを抱いていた。

「トリカブトの団長様ラブっぷりは筋金入りわよね。まあ確かにトリカブトからすれば自分を救ってくれた白馬の王子様なわけだし」

「うん……団長は私を助けてくれた人だから。恩人だから……」

「はいはい。貴方のお熱っぷりはよく分かってるわ。そんなに好きならいつかあの人だって振

り向いてくれるわよ、きつと」

「うん、そうなりたい。私、もっと強くなるの……」

アネモネとリュウゼツランが頷き、おかわりのリンゴジュースをアネモネが差し出ししてくる。「ありがとう」と答え、その甘さに舌鼓を打っていた時、第三者が休憩室に入ってきたことに気づく。反射的に一同の視線が扉の方へ向いた。

「あっ……！」

扉から出てきたのは紺碧色の騎士服をまとった長髪の優男だった。

トリカブトの大きな瞳にその青年が映り、コップを掴んでいた手の動きが止まる。対し、アネモネとリュウゼツランは即座に立ち上がって敬礼の動作を行った。

「みんな、模擬戦お疲れ様。張り切りすぎてケガとかしてないか？」
青年はひょうひょうとした態度で明るくそう言う。

彼こそが、セントフローレス騎士団^グを取りまとめる団長だ。

「うん、団長。何も異常はないよ。二人の様子も、ほら」

部下が相手でも親しく接する彼に対し、アネモネがまず明るく返した。

「ええ、無事終わったわ。団長様」

更にリュウゼツランが告げる。

彼の本名は騎士団の誰もが熟知しているが、^{フラワーナイト}花騎士達から団長と敬意を込めて呼ばれていた。

その慕われる理由の一つとして、職務に忙殺されてもおかしくない立場にも関わらず、フラワーナイト花騎士達の様子を気にかけてくれる事だ。

彼の人となりをよく知るフラワーナイト花騎士からの信頼は厚く、彼直属の部隊を希望するフラワーナイト花騎士も少なくない。

そしてトリカブト達三人は、フラワーナイト花騎士の中から選ばれた、団長が直々に指揮することも多い第一部隊のメンバーだった。

騎士団の中で実力をあげてきたトリカブト達は、騎士団のフラワーナイト花騎士達にも頼りにされ、今では「セントフローレス騎士団」のシンボルと言っても過言ではない。

「だんちよう！」

大好きな人を目にして、衝動のままにトリカブトは彼の胸へと飛び込む。

「おいおい、はしゃぐなって子供みたいに……おつかれさま」

トリカブトの小柄な身体を団長は難なく受け止めてくれた。

そしてやさしく髪を撫でてくれる。その行為が大好きだ。

「ケガがなくてよかった。……模擬戦、大変だったろ？」

「うん！……でもね、リュウゼツラン、ちよつと張り切り過ぎ。皆が見ている前で矢、たくさん撃っちゃうし、模擬戦なのに手加減なし。……私、負けちゃった」

「へこむなって。害虫とこれからも戦うには、リュウゼツランぐらい強い相手がトリカブトに

「丁度いいのさ。今のまま頑張れば、きつと勝てる。……一人での任務も、ちゃんと続いているみたいだな」

「うん。この前もね、荒野の外れに棲んでた、砦の害虫を『ガブリエル』と一緒に仕留めたんだよ。これもね、団長のおかげ……強くなれたのは、私を助けてくれた団長のおかげ。このまま頑張れば、きつと私、もつとつよくなれるよね……！」

「あら、完全に私、トリカブトの将来の踏み台扱い……!？」

「トリカブトを元気づかせようとしているだけだって。ママ、イチイチ妬かない妬かない」

「……確かに冗談で『団長の女房役が似合う』って言われるけど、せめてお姉さんにしてくれないかしら……!？」

「え、リュウゼツランが私のママ役なら……じゃあ団長のことパパって呼んでいい……?」

「やめろって。年頃の娘を持つほど人生経験に長けてないさ。これがな」

トリカブトは苦笑する団長に構わず、抱きつきながら彼に擦り寄る。

頬を膨らませたリュウゼツランはトリカブトに対し、「はいはい、そこまで。団長様が動けなくなるでしょ」と言いトリカブトを引き剥がした。

「ホント、子供よね」

「うん、可愛い妹分だよ。私達の……あははっ」

二人にからかわれ、トリカブトはますます顔が赤くなる。

ついには団長でさえトリカブトの頬をふくらませるそんな様子に笑い始めていた。

「もー！ 二人とも、笑わないでよー！ あっ！ リユウゼツラン、逃げた！」

「捕まえてご覧なさい？ 私より強くなるんでしょ？」

「むう……！」

湧き上がるどうしようもない気持ちから、リユウゼツラン目掛けて、トリカブトは突進する。

トリカブトが追い回す間。団長はさり気なくアネモネを引き止めて「後を頼む」と言い残してその場から去っていた。トリカブトはそれに気付くことなくリユウゼツランとともに廊下を駆け続ける。自分をからかう彼女にお仕置きをしなければ！

「うふふっ、あははっ……！」

今が楽しくて仕方がない。

トリカブトはこの楽しい日々を作ってくれた団長に感謝した。自分をこの騎士団の一人に……光当たる世界へ引き入れてくれたのは、彼なのだから――